

まちの中のアートの役割

出演 芦立 さやか、やまぐち くにこ
司会 都市魅力創造発信課長 松長
日時 平成27年11月21日(土)／午後2時～午後4時
場所 あまらぶアートラボ(A-Lab room1)



HAPS 事務局長

芦立 さやか Sayaka Ashidate

東山アーティスト・プレースメント・サービス(HAPS)事務局長。

武蔵野美術大学芸術文化学科卒業後、BankART1929で勤務。同時期に吉田有里とYOSHIDATE HOUSE を運営。展覧会制作やアーティストのコーディネート等に関わる。2010 年より、文化庁新進芸術家海外研修制度で、NY のResidency Unlimited に関わる。

NPO 法人淡路島アートセンター事務局長

やまぐち くにこ Kuniko Yamaguchi

淡路島生まれ・在住。自称、淡路島を耕す女。

2004 年の台風をきっかけにNPO 法人淡路島アートセンターを設立。現事務局長。

2005 年より淡路島においてアート媒介に地域での楽しみ方を探りながら、2012 年より「淡路はたらくカタチ研究島」の設立に関わり、島の生業づくりについても積極的に取り組んでいる。

地域にアートを組み込む

松長 今日は、アートを通じて実際にまちの課題に取り組んでいるお二人をお招きしました。簡単に紹介いたします。

芦立さんは、武蔵野美術大卒業後、BankART1929で活動され、その後、京都の HAPS 事務局長として活躍されています。

やまぐちさんは淡路島出身。いったん島を出られましたが、また戻って現在 NPO 法人淡路島アートセンター事務局長での活動と、「淡路島はたらくカタチ研究島」で活動中です。

まずはお二人の普段の活動からお話していただけますか。

芦立 さやかさん(以下「芦立」) HAPS は京都市の計画から始まりました。伝統的な文化だけでなく、新しい芸術を育むことも大事にしていくことなどを目的に有識者を集めて実行委員会を発足しました。現代表の遠藤水城が京都の状況を調査したところ、若いアーティストが市外へ流出している状況にあるということがわかりました。京都市には 40 近い大学があり、芸大だけでも 4 つもあるんです。しかし、アンケートを実施したところ、卒業後に京都に残る方よりも東京や地元、海外に移動する方が多い。せっかく京都に来ていただいているのだから、京都で生活してもらい、京都で育まれた才能が世界に羽ばたくようにしていきたいと考えたんです。

一方、京都の行政が抱える課題として、空き家が増えているという問題があります。HAPS のある東山区は祇園や清水寺といった観光拠点がひしめく場所です。住民も、1000 年の家系図を持っている方も居たりして、伝統を守っているまちです。そこを拠点に、空き家対策をしていかなくては、と考えている地元の方々を中心に「六原まちづくり委員会」を結成し、官民一体で対策に取り組まれてきました。そのような下地があり、HAPS を東山区に置くことが決まりました。

HAPS の実行委員会は芸大の先生やメディア、NPO、地域の方など。また、アドバイザーには大学の学長や副市長、アーティストなどに就任いただいています。事務局が具体的に何をしているかというと、相談窓口の開設です。京都にはそもそもバワフルなソフトパワーが多数存在します。面白い研究者やアーティストなどが多数いて、相談に応じてそういった方をつなぐハブとして機能するようにネットワークを構築しています。去年は 300 件を超える相談がありました。

アーティストは、絵を描いたり彫刻をつくるといった従来のイメージの方だけではなく、より斬新で多彩な表現活動に挑んでいる方が増えています。所属等せず、一人で活動している方がほとんどで、お給料も貰わず、社会保障を受けず生活するなど、自分の活動続けるためにサバイブしていく必要がある方が多数いるのが現実です。そんな彼らの一助となれるよう、相談を通じて、アイデアやネットワークを提供しています。アーティストからは、展示方法や効果的な PR 方法、予算が足りない、などいろんな相談を受けます。中でも物件に関する相談は多く、アトリエがない、住む場所がないアーティストと、逆に大きな場所を持っていて使いたいという大家さんを結び付けるということを行っています。

様々なカタチでアーティストのサポートを行っていますが、人件費はかかっているものの、人的な努力次第で何とかサポートをする、というのが HAPS の特色です。行政の従来の支援方法は「展覧会を企画して作家を呼ぶ」という発表の機会をつくるものや、助成金等の支援がありますが、それだけだと、選ばれたアーティストしかサポートを受けられません。我々のサポートはそうではありません。京都市を拠点とするアーティストに限りませんが、間口を広く持ち、我々のサポートを活用していける。もちろん最終的にはアーティストの自助努力は必要です。

HAPS が受けるアーティストの要望は様々です。場所に関する相談だと、長い絵を描くために長い部屋が必要とか、何百キロの重量に耐えられる土間や、夜中

まで音を出していい場所、など。これを我々がまちづくり委員会や大家さん、不動産屋さんと相談しながらマツチングしていきます。路地奥は立て替えの規制が厳しく活用は難しいですが、そうした場所をどう使うかなど考えた事例もありました。

「空き家」とは何かを紹介する冊子づくりに協力したり、アーティストは面白い奴だ、と思ってもらえるような、地元の祭などへの関わり作りや、空きガレージにプロジェクトマッピングで子どもが遊べる場所を作ることと地域の方との交流の機会も多数設けました。

東山区は少子高齢化が進んでいます。小中一貫校ができ、多くの小中学校を一度に統合しました。その閉校の一つをアーティストのアトリエとして活用する事例もあります。

「キュレーター招聘」という事業では、国内外で第一線で活躍するキュレーターを招いて京都のアーティストを紹介し、その後、その方が自身の企画展で京都のアーティストを呼んでくれた事例もあります。

ほかには、50m の布で何かしませんか、という企画でワークショップをしたり、ハロウィンイベントを開催するのに、アーティストに空間を作ってもらったり、コスプレしてもらって盛り上げたり。展覧会でアクリル板を使う作家からの相談で、大量のアクリルを購入すると予算を超えてしまうので、一緒に安い業者さんを探したり、元魚市場だった場所を芸大生の展覧会場として活用したりなど。

HAPS に関わる前は、各地のトリエンナーレなどでキュレーターやアシスタントとして務めてきました。多くの仕事では基本、行政や主催者からいただく予算があり、各アーティストに制作をお願いする形です。私は元料亭や元オフィスなど、従来の美術館やギャラリーではなく、特殊な空間をうまく活用することをアーティストに強いる場所で展覧会を開催することが多かったです。その場所をアーティストがなるべく活用しやすいように調整したり、どのように作品を設置していくか考えるというのが私の仕事でした。アーティストも各地

を転々としていますが、私自身も当時フリーランスとして様々な所を転々として行く中で、消費されていく漠然としたしんどさを感じていました。ただ展示ができれば良いじゃないか、というものでもなく、長期的な支援やアーティストがのびのびと制作できる場所が必要ではないか、と思っていたところに今の仕事に出会い、関わっています。

結局、我々が大家さんを紹介し、アーティストが住むようになると、アーティストがまちに関わって行くようになります。ゴミを捨てたり、掃除したり、挨拶したりされたり、毎日安い中華料理を食べたりしている。短期的な「作品を見せる」という関わりではなく、生活の中で「あいつ面白い」と思ってもらえるようにしたい、そんな環境を作っていきたい、という思いがあります。アーティストもこれまでの制度に対して「これおかしいんじゃない?」という鋭い視点を、優れたアーティストほど持っていて、でもその人は普段はただ中華を食べている人、みたいなまちとの関係性が面白いです。既存の規律に対して、多様性を認めていく存在になっていく。それがアーティストへの大きな支援にもなると思います。アーティストを受け入れられる関係性を作りたいです。

お祭りだと、「何万人入りました」ということが重要な評価軸になりますが、我々は細々と相談業務をしているので、我々の活動は見えにくいです。HAPS は一言で「何してる」と伝えにくいのですが、「相談業務を開設しているアーティストの支援団体です」、と言うようにしています。

やまぐち くにこさん（以下「やまぐち」） 淡路島には3市あり約13.3万人が暮らしています。私は淡路島出身で今も暮らしていますが、アートを意識して暮らしてきたわけではないんです。これまでも、触覚に触れた物に対して行動してきただけだと感じています。

2004年に台風が淡路島を襲い、水害で大きな被害が出ました。私も先祖の家が土砂崩れの被害に遭い、その家を家督相続という相続の義務でその家を相続し

ました。家は、つぶすにも何百万もかかります。この家は淡路市にあり私は隣の洲本市の住民だったので他地域に入るには色々課題があると感じていたので、ここぞとばかり仲間を10人巻き込んでNPO法人を作って、アサヒ・アート・フェスティバルの助成を受け、アート活動を始めました。これは影響が大きく、「アサヒビール」の冠で活動できることで、信用が増し、PRがしやすくなりました。また、同じような地域でアートプロジェクトを企画する団体にも巡り会い、ネットワークは全国に広がりました。そのお陰で神戸の大学生も参加してくれたりしました。

淡路島の高校生は、多くが進学を機に島外に出て行きます。ですから若者を集めるのが一苦労でしたが、活動自体は、そうした若者が集まる貴重な場所にもなっていました。家の色んな場所をアーティストに自由に使ってもらいました。空き家に触れた事で普段見えなかった部分が見え、大工さんの仕事について気付いたことも多く、大工さんを招いて大工の仕事展を開催したこともあります。

なぜこんなことを始めたかという、私は元々淡路島は大嫌いでした。キラキラするものは神戸にあり、淡路島にはなにもない。イオンしかないと思っていました。近所との距離が近すぎて、ものすごく窮屈で外に出たかったです。

そんな中、空き家に出会い、自分の周りをワクワクするもので満たしたい、と思ってあの家での活動を始めました。空き家リノベーションというテーマで、初年度は、他に空き家を3軒お借りし、「淡路島アートフェスティバル」を開催しました。毎年テーマを変え数年続いているうちに、常連さんができ、「淡路島にはおいしい物がいっぱいある」というキーワードをいただくようになり、お客さんの視点で淡路島を捉えたいと考えるようになってきました。「アート」という魔法に魅了され、様々なコトやモノに出会うたび、破天荒で行き当たりばったりな活動をしてきた感じです。「噴水見つけた」「空き家出て来た」といったところから、何かできな



やまぐち くにこさん

と常にどん欲にそのモノと向き合った結果だったとしかいいようがありません。

紡績工場の跡地で音楽ライブを開催したこともありま。スタッフは50人くらい。神戸のフェリシモさんが面白がってくれ、助けてくれました。島外からの応援も多数いただいています。他にも海も山も有るという魅力表現しようと、淡路島に住む25人、淡路島に初めて来る25人で「淡路島を楽しむ5つの方法」というテーマのワールドカフェもしました。そこで出て来たアイデアを「えいや」とイベントにしました。それが、「海に見えるビニールハウスのレストラン」というイベントです。砂浜に農業用のビニールハウスを建て、そこで一日だけのレストランイベントを行いました。東京在住の中心メンバーが企画を引っ張り、島外へのメンバーを募ると共に、住民や島外の大学生、そして行政とともに大きなネットワークで事業を進められた事、海辺の国の土地でも使用許可が取れたり、水道や電気を引っ張って来られるようになったりしてきたことが大きな成功体験となって自信ができました。

ほかにも最近活動をしている三市三様のプロジェクトにも触れます。

ひとつめは、淡路市のプロジェクト。私たちの活動のきっかけとなった同じ2004年の土砂崩れによって、五斗長の地域では弥生時代の巨大な鉄器をつくる「たたら場」が見つかりました。現在は史跡に認定され新たなスポットとなっていますが、何よりすばらしいのは、

五斗長の住民は全員で会社を作っており、全員が時給800円で働いていることです。そんな一致団結した地域で私たちは、2009年から関わり、五斗長ウォーキングミュージアムのプロジェクトを開始しました。

そこに至るには、スイスから移住して来たドイツ人映画監督のヴェルナーベンツェルと茂木綾子一家がいて、その人たちの視線で、日常の風景を見たとき、日常のあるものこそ、かけがえの無いものだと思ってきました。たとえば、山について。「お前は山に入ったことがあるか」と聞かれ、よくよく考えると道なき道の枝をかき分けて山に入っていく経験を淡路島に住んでいるのにやっていなかったと気づきました。

そんなことから、改めて山を意識し、歩く事が直接的な自然との対話だというコンセプトのもとアート作品を点在させ山に誘っていくためのプロジェクトになりました。いざ作品制作を構想し始めると、日に1台の車も通るか通らないかの道ですら、ペイントの許可が下りないことに直面しましたが、そこを逆手にとって、高圧洗浄機できれいにすることで道路に絵を描くアーティストを招くなど、問題がおきれば解決の方法を考えながら進めています。

次に、主に南あわじ市の津井地区ですが、淡路島は瓦の産地でもあります。現在30軒くらいになってしまった瓦屋の瓦を使ったプロジェクトです。瓦って、全部で何種類あると思いますか？ 実は800種類あり、



芦立 さやかさん

それをみんな分業で作っています。1軒建てるのに4枚しか使わないという瓦もあります。その地域に野村誠という音楽家のアーティストに入ってもらいました。

800種類の瓦を叩くと、色んな音階があるということに気づきました。いまでは「瓦の音楽プロジェクト」に発展し、海外からも同じように瓦をつくっている地域から招聘をうけ、交流をさせてもらえるようになってきました。

最後に洲本市では、長野県出身で、かつて沖縄のコザの商店街で活動をしてきた方で、人を巻き込むのが得意なアーティストの林僚児と組み地域に根付く「おたぬきさん」をテーマにアートイベントを運営しています。林さんは、地域の人だけでなく、神主さんを担ぎ出したり、市長も巻き込んでテーブルカットしたり、常にゆったりと緊張感を解し、関わった人たちがとても幸せな気持ちになるムードを持っています。放っておけないと思わせる人で、知らず知らずにいるんな人が巻き込まれていきます。中心市街地にはなくてはならない立ち位置のアーティストです。

また、他に私たちのプロジェクトでは、まちのあちこちから地元の合唱団やアーティストに登場いただいて、その音楽をたどりながらまちあるきをする「ためきのまち音楽祭」を開催したり、商品開発として淡路弁を使った手ぬぐいを作ったり、地元の人を取材して冊子をつくったり。島のコトやモノからアートセンターの活動を媒介にあらゆる関係性をつくっています。単にアートに寄ってきて！って言っちゃうと、ちょっと警戒するかもしれない。だったら、自分たちで動いてみよう。どんな課題があるのか見てみよう。そんな気持ちで、自分たちのわくわくできるものを島中で探しています。触覚だけで動いている、というのはそういう「感度」という意味です。

「本音」からくる「信頼」

松長 お互い、活動のお話しをお聞きして感想などはいかがですか？ 1回目の天野太郎さんのトークで、

「アート」というフレーズを使うとアートに関心のある人しか来ないということで、別の表現を使うことを意識したというお話がありました。「まちの中で何をするか」というのがお二人のテーマだと思いますが、どのようなことを心がけて活動していますか。

芦立 私は完全に「よそ者」です。北海道、神奈川で暮らしてきて、関西にも縁がなく、完全なよそ者であるがゆえにその場所を存分に楽しんでやろうという思いがあります。おじいちゃんおばあちゃんに、ちゃんと挨拶もするし、片付けもちゃんとするように努めています。HAPSのオフィスがある地域にも関心を持っています。近くのお寺には「あの世へ続く井戸」があるのですが、平安以前の河原町は、鴨川で隔てられており、鴨川より西側の住人にとって、「東側は風葬の地域であり、あの世とこの世をつなぐ場所だ」と思われていました。それが基になっている逸話も多くあります。そうした活動を率先して楽しんだり、実際にその近くに住んだり、自治会にも入って活動したり。我々が何かをやる前に地域の人がスゴすぎて、60代、70代の方々が率先して祭りを盛り上げようとしているので、我々が少しでもそれを手伝えたら、という思いです。そこにアーティストが関わればさらに違う面白さを見つかることができるのでは、と考えています。

やまぐち 私は「地元出身だから」ということで、大失敗したことがあります。空き家を拠点としたアートフェスティバルをやったときに、隣のおばちゃんがすごく感謝してくれました。誰も来なかった場所に人が来て、街灯の電球も変えてもらえたい、と喜んでくれました。3か月間休み無くイベントをし、大成功したと思っていましたが、おばちゃんが最後の日に、「また空き家に戻るねんな」と言われました。そのとき、「あ！」と。終わればもとの空き家に戻ってしまう。それは「もとの」ではなく「空き家」を周知してしまったと知り、あのイベントをしたことで、おばちゃんももっと防犯面で苦労したのではないかと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。今後こんな無責任なイベントはやるまい。「打ち

上げ花火はできない」と反省しました。

そこから、「やるからにはじっくりと関係性をつくりながら取り組めるもの」と考えてやってきました。社会に受け入れられるよう、誰にも迷惑をかけないようにと考えるながらやってきました。でも、最近は、開き直ったことも増えてきました。それは、漁業組合の壁画の仕事の請け負った事からでした、内容は、「漁師の担い手がいないから、担い手ができるように、まちが発展するように」とのことで描いてほしいという依頼で、美大学生をコーディネートし順調に進み出そうとしていましたが、私の発言「淡路島が嫌い」ということばから一気に火がつき、そんな人間に壁画なんか頼みたくないという人と「言葉の綾や」となだめる人がいましたが、私も、易々とごめんなさいとは言えず、そのまま数週間を費やしました。ただ、陰悪なまま仕事は進められないので、何度も連絡をとり何度も通い話をしているうちに「お前はこの前の講演で淡路島が嫌いだと言っていた。わしらは、嫌いといってしまったら仕事が続けられないのだ。がんばって仕事をしているんだ」ということが理解でき、踏み込んで本音で言い合える関係性の大切さも知りました。社会で活動するには、それなりの社会性は必要ですが、関係性をつくり出すには時にさまざまな御法度を超える勇気も必要だと思いました。

芦立 私は地域に、甘えられる所はとことん甘えるようにしています。オフィスを修理する時、大工さんに教えてもらいながら素人が直して行く、という形で進めていましたが、「まだか、まだか」と地元の方に言われるたびに「あとぞうきんが10枚あれば」といったことを言うと、工務店の方が持って来てくれたりする。工具を持って来てもらったりしたこともあります。

松長 地域の人も、甘えられるのが嬉しいのでは？

芦立 みなさん誇りを持っているので、張り合うと「若造に何が分かる」となりますが、「教えてください」と言えば教えてくれる人もいます。

やまぐち 最近は手の内を読まれて来て、「また何かやらせようとしてるやろ」と言われたり。

芦立 ずっと住んでいる人にとっては、若い人が少しでも増えるのは素晴らしいことなので、我々が地域の方を尊重しつつ盛り上げに協力できる、というのは大事だと思います。

松長 芦立さんは、関西は初めて、とのことですが、横浜との違いを感じますか。

芦立 私は郊外のマンションで育って来たので、上下の住人の顔も分からない関係が普通でした。今は隣の声も聞こえるし、京都の古いまちは隣とぎざぎざに建っているの、隣の猫がうちに逃げ込んで来たり、隣のおばちゃんに「洗濯物が多いね」と話しかけられたり、地域の運動会があったり、地藏盆や「お火焚祭（おひたきまつり）」という五穀豊穡を祈って護摩木（ごまき）という願いを込めた棒を燃やす行事があったり。行事に参加することも大きなウエイトを占めています。楽しく参加していて新鮮です。

松長 HAPSは相談料がかかるのですか。

芦立 無料です。京都市の事業として展開しているから。相談は、京都市で活動したいとか京都に拠点を持ちたいというものであれば市外の人でもOK。海外からの相談も受けていて、海外に長くいるが、10年ぶりに拠点を日本に移したいが、どこに戻ればいいのか分からない、という人が我々に相談にきます。

松長 年間にどれくらいの人に住居を紹介しているんでしょうか。

芦立 はっきりとした数はわからないのですが、これまでに40件とか。京都市による空き家対策の補助金もあるので、活用しながらアーティストだけでなく業者さんと空き家を修繕して移住する、という事例もあります。

松長 スタッフは何人くらい？

芦立 HAPSは常勤が3人です。

やまぐち 私は常勤1、パート3人。アートセンター本体で常勤3人です。動かすにはスタッフが必要です。私は窓口みたいな感じです。今日のタイトルにもありますが、まちの中にアートという言葉が出て来ていることに感慨もひとしおです。

行政との関わりは

松長 まち自体を違った視点でみるのがアーティストの役割のひとつかと思います。お二人とも行政と関わって活動していますが、行政にどんなことを求めますか。また、利用しにくい部分・制度などありますか。

芦立 行政の担当の方は、文化に詳しくて文化のセクションにきているとは限らないので、まず少しでも文化や若いアーティストに関心を持って欲しいです。あとは予算をとってくる能力。文化のセクションの人間が我々を理解していても、財政の担当に理解させることが難しいと思うので、そこで必要性を説得できる能力は重要です。翻訳をしていくところできかに噛み砕いていくかという能力。

松長 予算はあるにこしたことはないと思いますが、現状はどうですか。

芦立 担当の方にはとても理解していただいています。はがゆいのは、相談件数は増えているが、我々が相談を受けていて限界があるので受けきれない部分があるということです。コストの中でどう割り切って活動していくかということではあるのですが。

やまぐち 私は13年間観光課にいました。元々、地元の郷土史の絵本を描かせてもらったり作家活動をしていましたが、淡路島の洲本市にはギャラリーとしての施設がありませんでした。会議室にパーティションを置いて設置できるタイプの部屋しかありませんでした。そこで作家の立場から淡路島にギャラリーを作りたいという活動を行って、空き家だった後に近代化産業遺産となった紡績工場の跡地をギャラリーとしてリノベーションし使えるようになりました。

結果、自分で責任を取るような形で私がその管理をすることになりました。

行政の中にいると「いいもの」という基準がないように思えました。相見積もりで「安いもの」が基準となって「質」というものが問われない。というのが歯がゆく思います。だからこそ翻訳が必要だと思います。私た

ちのような組織が行政の目となってものを観る、そして伝える手段を持ってほしいと思います。アートと言わずにまちづくりとかブランディングとか、どう表現して伝えるか。私たちにも問われお互いに成長していけると思います。アートはわからないといわれますが、それはお互い様で、役務費とかいわれても行政用語もよくわからない事もあります。

今は行政の色々な窓口に対して、それぞれに合った事業を提案し、実施しています。淡路島においては、文化全体を担当するセクションがあればと思います。

芦立 役所の規則で、イスは安いものであっても備品扱いなので買えない、などが生じます。そういうときは地域のの人に要らないイスをもらったり。IKEAで棒などを買ってきて、自分で机を作ったりしました。

松長 色々な課から事業を請け負ってというのはまさにまちづくり、という気がしますね。

やまぐち 毎年の事業規模が年度内に決まっていないので、継続的な雇用が難しく、もう少し早く分かっていると思うこともあります。

松長 芸術祭などで地域で盛り上がっても、雇用まで結びつかない現状がありますが、どんな仕組みがあればよいと思いますか。

やまぐち 緊急雇用の制度を活用して、人件費の補助を受けています。大半のスタッフは、これまでは仕事をしながら土日で携わっていましたが、この制度があって事業規模が拡大していきました。しかし、それが良いのか悪いのか、という疑問が出て来てもいます。それまでは情熱で運営してきましたが、仕事になってしまうと、やりたくないこともしなくてはいけないということも出てきます。ですので、元に戻す、ということも視野にいられています。勇気のいることですが、縮小を検討していきます。私たちのNPOは、みんなのやりたいことをやるためにある場所になってほしいです。淡路島は食料自給率も120%だし、1万円で借りられる家もあるので、みんなの関わりたいそれぞれのスタンスを意識しています。

どんな相談もできる場所へ

松長 今後どんな展開をやっていきたいですか。

芦立 最初の頃はイベントを多く開催したりしていましたが、相談業務が主なので、より良い相談業務ができれば。

松長 現在の業務では、文化の部署以外、ハード系の部署ともやり取りがあるのですか。

芦立 基本的には文化系の部署です。京都市役所は2万人の規模なので、組織が大きく、別の部署からも依頼がくるということはたまにあります。ハード系の部署が、アート系の補助金を作ったり、ということもあります。

担当者が人事異動で変わっても、ずっと関係性を築いて行くことも大事です。話を良く理解してもらっても、異動してしまう。ただ、裏を返せば、自分の理解者が別のセクションにも居ることです。HAPSのことをその部署で伝えてもらって、新しい事業や関係性を築いていきたいです。

やまぐち HAPSの良さがよくわかりました。うちの場合は移住支援にも力を入れようと思っていて、参考にさせていただきたいです。

芦立 アーティストは、わからない中で壁にぶつかっていったという部分があるので、相談する場所があるというのは貴重です。細かい相談もきます。人生相談的なものもあったりして。

松長 アーティスト相談、ではあるが、若い人たちの相談を聞く、という要素もありますね。

このA-Labという場所について助言をいただければ。

芦立 スペースも広くて素晴らしいので、自分たちでなんとかすると思わずに、協力してもらって、一緒にやる、という姿勢でいくのが、一番無理のない方法だと思います。そうでないとお客さんもアイデアも縮小していきます。広がる形で外へ外へ行けば良いと思います。

やまぐち 自分たちの活動もそうですが、どうすれば新しい方に関わっていただけるかというのが課題です。ま

ちの人が何を望んでいるか、といったことが分かるようになればいいですね。会社帰りにちょっとよって勉強したりパソコンを使ったりできる場所があれば人がちょっと集まって来やすいかもしれません。

芦立 友達の弟が朝の情報番組のディレクターをしているようで、デバ地下で奥様の話を、聞き耳を立てて情報収集しているとのこと。参考にしては。

松長 当事者をどれだけ増やせるか、というのが課題です。同じ人しか来ないという状況にならないことですね。

では、お二人にご質問がある方は？

【HAPS の相談に来る人の年代、作風は？】

芦立 大卒すぐから定年後まで幅広いです。定年後に発表したい人など。悩みが深いのは 30 代からアラフォー世代です。ギャラリーや美術館でワークショップをするようなレベルにはなっていて、辞めたくはないが、アートだけで食べられるわけではない、世界を飛び回っているが作品は売れず、借金だらけだ、という人が次の突破口は何かという我々では解決できない話です。だが、そこをどう乗り越えて行くかも我々の課題で、これを越えればまた京都に新しい面白い人が出て来たとなったり、生活に何かゆとりのあるものをもたらしたりできるかもしれない。

やまぐち アーティストの相談後に専門家の対応が必要になった場合、アーティストが負担するのですか。

芦立 様々なケースがありますね。専門家とアーティストが直接会ってただざっくばらんに話す場合もあれば、人によっては相談料が発生することもある。謝礼を払ってトークイベントを開催する場合があります。

芦立 やまぐちさんは色々な仕事をしているが、どうやって生計を立てているのですか。

やまぐち 現在は NPO の中間支援的な立場で淡路島の相談役としての職があり、神戸に席があります。その NPO 団体からスタッフとしての収入を得ています。また、地域のアートイベントや行政等の事業コーディ

ネーターとしての収入もあります。商品開発や様々なデザインなども受注しています。時には、生業を生むためのスキルアップ講座も実施して自分も学びながら運営もしています。食糧自給率も 120%の淡路島ですからなんとか生きてはいけます。

松長 アーティストを、緊急雇用を活用して雇用するのは面白いですね。

芦立 アーティストを対象に募集する地域おこし協力隊も増えていますね。

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.1
オープニング・トーク

発行		
編集	尼崎市	都市魅力創造発信課
制作		